

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ドメスティケーション研究のさらなる発展をめざして：
ドメスティケーションと土着宗教：
アンデスの場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001159

第5章 ドメスティケーション研究の さらなる発展をめざして



トウモロコシとマニオクを手にする神像の描かれた紀元数世紀頃のモチェ文化の土器（高さ約20cm）。トウモロコシの果穂が5つも見えるが、これはアンデスでは稀にしか見られない。（ペルー・天野博物館館蔵）

ドメスティケーションと土着宗教

—— アンデスの場合 ——

山本 紀夫

国立民族学博物館名誉教授

アンデスでは、数多くの植物が栽培化され、それらの栽培植物には多様な品種も生み出されている。それでは、なぜアンデスではこのように数多くの栽培植物とともに多様な品種が生み出されたのであろうか。それを本稿では主として人間側の認識と行為から明らかにしようとする。とくに注目するのは、現地でワカ信仰とよばれる土着宗教である。このワカ信仰は古くから現在にいたるまでアンデス農民のなかに生きつづけ、しかも動植物を含めて自然界に生じた異常なものを「聖なるもの」として重視してきた。このような考え方は、新たな品種の創出や維持、ひいては動植物のドメスティケーションとも密接な関係をもつと考えられる。

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 1 はじめに | 6 多様性を生むワカ信仰 |
| 2 多種多様なジャガイモとトウモロコシ | 7 プレインカ時代の土器と織物にみられる生物の多様性 |
| 3 多様な品種を栽培する理由 | 8 歴史に埋もれた栽培植物と人間の関係 |
| 4 「変わりもの」を生み出す仕掛け | —むすびにかえて |
| 5 「トウモロコシの神」と品種の多様性 | |

*キーワード：アンデス、トウモロコシ、ジャガイモ、土着宗教、品種の創出と維持

1 はじめに

アンデスを訪れるとき、わたしが楽しみにしているものがある。それは、野天でひらかれる市を見て歩くことだ。そこでは、地方色豊かな民族衣装をつけた農民が自分の畑でとれた、わずかばかりの農産物をもちよって、売ったり物々交換したりする光景が見られる。とりわけ、わたしが興味をもっているのは、市で売られている様々な栽培植物だ。それというのも、アンデスの市では日本ではお目にかかれぬような珍しい栽培植物が見られるからである。

たとえば、アンデス原産の栽培植物としてはジャガイモが有名であるが、それ以外にもアンデスでしか栽培されていない栽培植物は少なくない。実際に、表1はアンデス原産の家畜および栽培植物であるが、これらの大半がアンデスでしか見られないものなのである。そのため、アンデス原産の栽培植物はきわめて多種多様であり、アンデスは世界の栽培植物の5大センターのひとつとして知られているほどである (Vavilov 1926)。

表1 アンデス原産の家畜および栽培植物 (山本 2007b)

和名	現地名*	学名(科名)
家畜		
リヤマ	llama	<i>Lama glama</i> (ラクダ科)
アルパカ	alpaca	<i>Lama pacos</i> (ラクダ科)
テンジクネズミ	cuy	<i>Cavia porcellus</i> (テンジクネズミ科)
擬穀類		
センニンコク	achita	<i>Amaranthus caudatus</i> (ヒユ科)
カニワ	canihua	<i>Chehnopodium pallidicaule</i> (アカザ科)
キノア	quinoa	<i>Ch. quinoa</i> (アカザ科)
塊茎・塊根作物		
アヒバ	ajipa	<i>Pachyrhizus erosus</i> (マメ科)
ラカチャ	racacha	<i>Arracacia xanthorriza</i> (セリ科)
食用カンナ	achira	<i>Canna edulis</i> (カンナ科)
マカ	maca	<i>Lepidium meyenii</i> (アブラナ科)
オカ	oca	<i>Oxalis tuberosa</i> (カタバミ科)
ヤコン	yacon	<i>Polimnia sonchifolia</i> (キク科)
ジャガイモ	papa ruki	<i>Solanum</i> spp. (ナス科) <i>S. juezepczukii</i> , <i>S. curtilobum</i> (ナス科)
マシュア	mashua	<i>Tropaeolum tuberosum</i> (ノウゼンハレン科)
オユコ	olluco	<i>Ullucus tuberosus</i> (ツルムラサキ科)
マメ類		
リマビーン	pallar	<i>Phaseolus lunatus</i> (マメ科)
インゲンマメ	frijol	<i>Phaseolus vulgaris</i> (マメ科)
ピーナッツ	mani	<i>Arachis hypogaea</i> (マメ科)
パカイ	pacay	<i>Inga edulis</i> (マメ科)
ハウチワマメ	chocho	<i>Lupinus mutabilis</i> (マメ科)
果実類		
ルクマ	lucuma	<i>Lucuma obovata</i> (アカテツ科)
パパイヤ	papaya	<i>Carica papaya</i> (パパイヤ科)
チェリモヤ	cherimoya	<i>Annona cherimoya</i> (パンレイシ科)
トゲパンレイシ	gunabana	<i>A. muricata</i> (パンレイシ科)
コダチトマト	pepitomate	<i>Cyphomandra betacea</i> (ナス科)
ペピーノ	pepino	<i>Solanum muricatum</i> (ナス科)
果菜類		
トウガラシ	ají locoto	<i>Capsicum baccatum</i> (ナス科) <i>C. pubescens</i> (ナス科)
カボチャ	zapallo	<i>Cucurbita mixta</i> (ウリ科)
トマト	tomate	<i>Lycopersicon esculenta</i> (ナス科)
その他		
タバコ	tabaco	<i>Nicotiana tabacum</i> (ナス科)
ワタ	alododón	<i>Gossypium hirsutum</i> (アオイ科) <i>G. barbadense</i> (アオイ科)

*地域によって大きく異なるので、ここでは主としてペルーの、それも都市部でも使われている名称によった。

それでは、なぜアンデスではこのように在来の栽培植物が多いのであろうか。これは、わたしがアンデスを初めて訪れた1968年以来の疑問であった。たしかに、ジャガイモを初めとしていくつかの作物については、生物学的に栽培化のプロセスが明らかにされるようになっている。しかし、栽培植物も家畜もどちらも人間によって創り出されたものであり、その創出、すなわちドメスティケーションに人間がどのように関わったのかという点について、生物学者はほとんど何も答えていない。また、人間を研究対象とする民族学・文化人類学の分野でも、この問題に挑戦する研究者はまったくいないといっても過言でないほどだ。

おそらく、これは栽培植物も家畜もきわめて古い時代に栽培化および家畜化されたために、ドメスティケーションと人間の関係にかかわる証拠が残されていないと考えられているからであろう。そのためか、アンデスにおけるドメスティケーション研究では生物と人間との関係についての研究は手つかずの状態にとどまっている。が、はたしてドメスティケーションにかかわる生物と人間の関係を追求する手がかりはまったく残されていないのであろうか。

このような疑問をもちながらアンデスで調査をつづけて30年あまりたち、近年になって手がかりがまったくないわけではないことに気づいた。それは、アンデスにはきわめて多様な在来品種が存在し、それを栽培していることである。先の表にあげたアンデス原産の栽培植物の大半には、程度の差こそあるものの、じつに多様な品種が見られるのである。

その代表的なものがジャガイモである。世界中で広く栽培されているジャガイモは1種だけであるが¹⁾、アンデスでは染色体数が24の2倍体から、36の3倍体、48の4倍体、さらに染色体数が60の5倍体までの7種もの栽培種がある。しかも、これらの7種のそれぞれに多様な在来品種が生み出されており、アンデスでは数千種類もの在来品種が知られているのである。

その片鱗は、先述した市でも見ることができる。イモの形、大きさ、色など、じつに変異に富んだジャガイモが売られているからである。なかには、「これでもジャガイモか?」と言いたくなるような奇妙な形態をしたものさえある(カラー写真1)。これはトウモロコシもそうである。トウモロコシの起源地は中米であることが明らかにされているが、アンデスにもきわめて多様な品種が見られ、そのなかには世界で最も大きな穀粒をつけるものも知られている²⁾。

それでは、なぜアンデスではこれほど多くの在来作物や多様な在来品種が栽培されているのであろうか。一般に、在来品種は改良品種よりも収量のはるかに低いにもかかわらず、アンデスでは依然として収量の低い在来品種を栽培している農民が少なくないのである。これは、わたし自身が調査をしたペルー南部高地のクスコ地方に位置するマルカバタ村も例外ではなかった。そこでは、主食となるジャガイモはもちろんのこと、主

として酒の材料として利用されるトウモロコシなども多数の在来品種が栽培されている。

そこで、本稿では、このマルカパタ村での調査結果をもとに、アンデスの農民が在来品種にこだわる理由、さらに多数の品種を栽培する理由を探りながら、ドメスティケーションにかかわる人間側の要因を探ってみたい。なお、ここでいう在来品種とは、アンデス農民が栽培植物の形質の違いを認識し、区別して異なった呼称を与えているものである。

2 多種多様なジャガイモとトウモロコシ

民族学の調査のために、わたしが1978年から1987年にかけて通算で約2年間滞在したマルカパタ村はペルー・アンデスの東斜面に位置し（図1）、インカ以来の伝統的な色彩を色濃く残した農村である（写真1）³⁾。たとえば、本稿と密接な関係をもつ宗教に関しても例外ではない。周知のように、スペイン人がインカ帝国を征服して真っ先に始めたことはキリスト教の布教であり、マルカパタでも16世紀か17世紀にはカトリックの教会が建てられた。そのため、アンデス農民はカトリック教徒であると思われるが、決してそうではない。とくに、一般にインディオの名前で知られる先住民の人たちは、古くからの土着宗教を依然として信仰している。

すなわち、彼らは山や大地にも神が棲んでいると信じており、しばしば山や大地に祈りを捧げる。たとえば、マルカパタ村の中心地の集落であるプエプロ（ケチュア語では

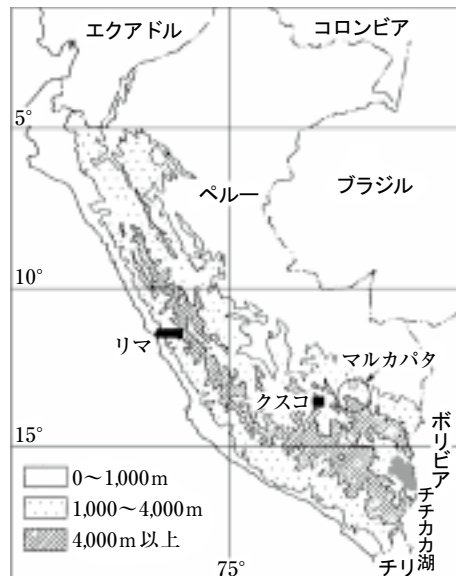


図1 マルカパタ村の位置



カラー写真1 アンデスにおけるジャガイモの在来品種。イモの色や形にきわめて大きな多様性がみられる（写真は国際ポテトセンター提供）



カラー写真2 マルカパタで栽培されている多様なトウモロコシ



カラー写真3
播種のためのトウモロコシの種とり作業。手前にトウモロコシの多様な品種が見られる。



カラー写真4
トウモロコシの播種作業。3～5粒ずつ播種する。



カラー写真5
手前に見えるロゼット（根生葉）型の植物が野生ジャガイモ（*S. acaule*）。後方にはジャガイモ畑が見える。

ヤクタ)の背後にそびえる山、パチャトサンにもアップとよばれる神が棲んでいると信じており、農耕や家畜繁殖の儀礼のとき、この山にむかって村びとは「アップ・パチャトウサン」と呼びかけ⁴⁾、その方向に酒をふりまく(写真2)。

また、彼らは大地にもパチャママの名前で知られる農耕神が棲んでいると信じている。そのため、たとえばジャガイモの収穫儀礼のときも、コカの葉を広げた織物の上に収穫したばかりのジャガイモをおき、そこに「サンタ・テセラ・パチャママ(聖なる大地、パチャママ)」と唱えながら、酒をたらす。この行為は、先住民の人たちのパチャママ神に対する根強い信仰をよく物語るものであろう。

伝統的な色彩は、本稿の対象である農業でも色濃く残されている。約50種におよぶ栽培植物の大半はアンデス伝統のものであるし、中心的な農具もインカ以来の伝統である踏み鋤が使われている。また、インディオの大半がアンデス原産のリヤマとアルパカを飼い、その家畜飼育とともに伝統色の濃い農業もおこなって自給自足的な生業を維持しているのである(山本 1980; 1996)。以下では、これをもう少し具体的に述べておこう。

彼らは、標高4,000メートル前後のプナとよばれる高原に居住地をもつが⁵⁾、その暮らしは高地に限られない。すなわち、アンデス東斜面にみられる大きな高度差を利用し、家族ごとに家畜を飼い、主作物であるジャガイモもトウモロコシも栽培している。これらの耕地のなかには家から遠く、毎日通うことのできないものもある。そのため、このような耕地には植え付けや収穫のときに一時的に移り住んで作業をするための出作り小屋をもち、また放牧地にも家畜番小屋をもつのである(図2)。

ジャガイモの耕地は標高3,000メートルあたりから4,300メートルまで連続して見られる。このようにジャガイモ畑は1,000メートル以上もの大きな高度差のなかに分布している

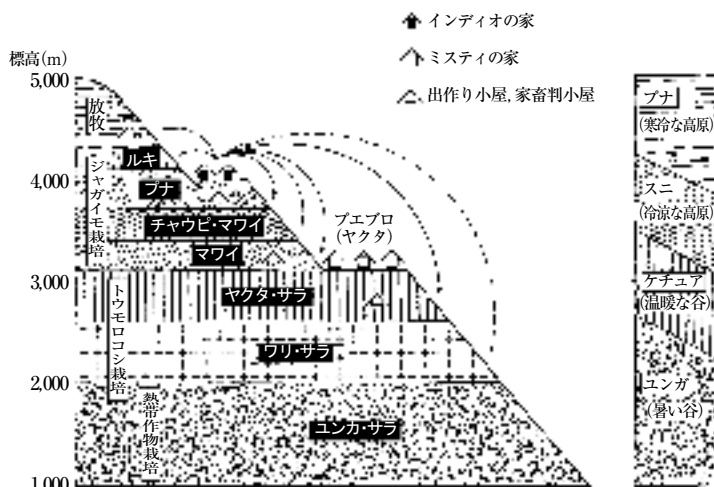


図2 マルカバタ村における高度差利用と出作り小屋の位置(山本 1992a)



写真1 マルカバタ村の中心地、プエプロ（ヤクタ）。標高約3,100mにあり、手前に藁葺きのカトリックの教会が見える。後方の山は、神が棲むといわれるパチャトゥサン。なお、この集落に住むのは一般にメスティーンとして知られるミスティであり、先住民のインディオはプナとよばれる高原地帯に住む。



写真2 ジャガイモの収穫儀礼。大地の神とともに、「アプ」とよばれる山に棲む神にも酒をふるまう。

ため、そこでは高度によって気象条件が異なっている。おおまかに言うと、高地ほど雨量が少なく、気温は低くなる。とくに、農耕限界となる標高4,300メートルあたりの気温は低く、ときに栽培期間中でも降雪をみることさえある。そのため、このジャガイモの栽培ゾーンは四つに分けられ、それぞれ、植え付けや収穫の時期が異なっている。それが図中に示されたルキ、プナ、チャウピ・マワイ、マワイとよばれるものである。なお、これらの耕地は、いずれも農民が成員権をもつ共同体の共同耕地であり、その利用にあたっては様々な規制がある。

ただし、これらの名称はジャガイモの品種を示しているわけではない。ルキやプナは、パパ・ルキ（パパはジャガイモの意）とか、パパ・プナとよばれ、それぞれ、ルキのジャガイモ、プナのジャガイモを意味するが、単一の品種ではなく、そこで栽培されるジャガイモの在来品種をいくつも包含している。これは、チャウピ・マワイやマワイも同様である。そして、もっとも多様な品種の見られる耕地がパパ・プナのそれで、数十種類のジャガイモが含まれ（図3）、全体としては約100種類が栽培されているのである。

ところで、ここで品種といたり、種類といているのは、先述したように農業試験場や種苗会社などで改良された、いわゆる商業品種ではない。そのような商業品種もないわけではないが、それはごく一部で、ほとんどが古くからアンデスで栽培されてきた在来品種である。そのせいで品種名も大半がスペイン語ではなく、ケチュア語によるものである。

スペイン語はアンデスでは16世紀以降に使われるようになったが、現在では広く話されている。一方、ケチュア語は、インカ時代には帝国の公用語であった言語で、今も伝統的な社会で使われている。マルカパタ村でもケチュア語が話されているが、村人は必ずしもケチュア語による在来品種名のすべてが理解できるわけではない。たとえば、品種名の由来を聞いても、村人が知らない場合も少なくない⁶⁾。

このことは、ふたつの解釈ができるであろう。ひとつは、その品種がきわめて古い時代から栽培されていて、その呼称の由来が忘れ去られてしまったというものである。もうひとつは、その品種が呼称とともに、由来が知られないまま導入されたという可能性である。後者の代表的なものに、アイマラ語による品種名がある。アイマラは、ティティカカ湖畔を中心にペルー南部からボリビア北部にかけての高地で暮らす民族であり、その言語はケチュア語とはかなり異なっている。

つぎに、トウモロコシの品種についても報告しておこう。トウモロコシは温暖な気候に適した作物であり、マルカパタ村でも標高3,000メートル以下の温暖な低地で栽培される。そして、その栽培高度域は標高約1,000メートルから3,000メートルまでの約2,000メートルと大きく、トウモロコシも栽培される高度によって三つのグループに分けられる。それが、先の図中に示されているユンカ・サラ、ワリ・サラ、そしてヤクタ・サラである。

これらの名称のうちのサラはケチュア語でトウモロコシのことであり、さきの三つのグループは、それぞれ、「ユンカのトウモロコシ」、「ワリのトウモロコシ」、「ヤクタのトウモロコシ」の意となる。また、ユンカおよびヤクタは、マルカパタの村びとによる環境区分の名称である。とくに、ユンカはアンデスで広く使われている言葉で、一般にアンデス山麓の低地をさすことから、ユンカ・サラは「低地のトウモロコシ」というほどの意味である。一方、ヤクタはケチュア語で町または集落を意味するが、先述したようにマルカパタでは標高3,000メートルあまりのところに立地し、スペイン語でプエブロとよばれる、この地方の中心的な集落を指している。したがって、ヤクタ・サラはこのプエブロの近くで栽培されるトウモロコシのことなのである。

もうひとつのワリ・サラの意味については十分にはわかっていないが、家畜のリヤマとアルパカの雑種もワリとよばれることから、中間タイプというような意味があるのかもしれない。それというのも、ワリ・サラは、ヤクタ・サラとユンカ・サラの中間地帯で栽培されるトウモロコシだからである。あるいは、家畜のワリが輸送力の点でリヤマより劣り、獣毛の質の点でアルパカより劣ったものを指すことから、ワリ・サラにもそのような価値観が含まれているのかもしれない。これら三つのグループのトウモロコシのうちで、もっとも味がよく、高い評価を受けているのがヤクタ・サラであり、それに次ぐのがワリ・サラ、そしてユンカ・サラは最低に位置しているからである。

なお、このような評価のせいから、ヤクタ・サラにもっとも品種が多くて約20種類、ワリ・サラが10数種類、そしてユンカ・サラがもっとも少なく数種類だけである。ジャガイモほどではないにせよ、トウモロコシでも40種類ほどの在来品種が栽培されているのである（カラー写真2）。なお、このヤクタ・サラおよびワリ・サラの耕地も、ジャガイモの耕地と同じように農民が成員権をもつ共同体の共同耕地である。

3 多様な品種を栽培する理由

さて、それでは、これほど多くの品種をひとつの村で栽培し、利用するのは、なぜなのか。これに答えるまえに、はじめに収量の高い商業品種ではなく、収量の低い在来品種を栽培する理由について検討しておこう。ただし、ここでは紙面が限られているので、ジャガイモの場合についてのみ述べることにしよう。

さて、村人に聞いてみると、いくつかの答えが返ってくる。ひとつは、改良品種は入手しにくいという。村では手に入れにくいため近郊の町で購入しなければならないが、現金収入の道が限られているので、手に入れにくいというのである。

改良品種は化学肥料を大量に与えてこそ収量があがるが、その肥料を購入する現金がないという声もある。一方、在来品種は肥料をあまり与えなくても、ある程度の収量があり、わざわざ化学肥料を買うまでもないという。さらに、化学肥料を与えると、1、

2年は収量があがっても、そのあと畑の土壌がダメになってしまうともいう。

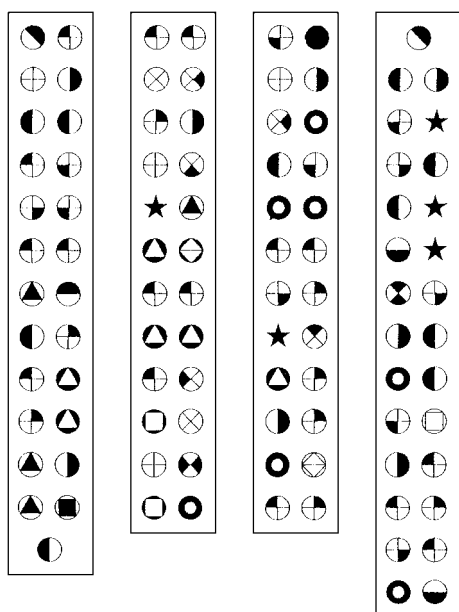
さらに、改良品種は味がわるいが、一般に在来品種は味がよいとも言われる。とくに、高地で栽培されたジャガイモほど味がよいとされる。しかも、改良品種は水分含量がおおいため、水っぽく、味がわるいだけでなく、貯蔵にも適していないとされる。したがって、改良品種を栽培しても、ふつう自家消費することではなく、ほとんどが市場むけであり、自分たちが食べるのは在来品種だけなのである。

以上が、改良品種ではなく、在来品種にこだわる主だった理由である。さて、それでは、このような在来品種を一種類ではなく、多くの種類を栽培するのは、なぜなのか。村人によれば、それは品種によって栽培できる環境が異なるからであるとされる。この

ことは、品種によって環境に対する適応性が異なっていることを意味するのであろう。

先述したように、マルカパタ村では1,000メートル以上の高度差のなかでジャガイモが栽培されているが、この栽培高度のなかで低い方は気温が高く、雨量も多いのに対し、高い方は気温が低く、雨量も少ない。したがって、高地でのジャガイモ栽培には耐寒性の強いものが求められるように、高度によって栽培されるジャガイモの品種は違っているのである。

しかし、同じ高度のところでも、あるいは一枚の同じ畑のなかでも、しばしば何種類も、ときに30種類をこすジャガイモが栽培されることがある。たとえば図4は、マルカパタ村の標高約3,900メートルに位置するプナの共同耕地の一部で見られたジャガイモ品種であるが、このように畑の一部だけを見ていても、2倍体、4倍体、そして5倍体のジャガイモまであり、品種の上では30種類を超えるものが見られる。これはマルカパタだけでなく、アンデスで広くみられる慣行である



- | | | |
|-----------------|----------------|---------------|
| ● チェケフォーロ(2x) | ⊗ ルントゥーサ(4x) | ⊙ ユーラフ・ロモ(5x) |
| ● トゥルーニヤ(2x) | ⊗ スーリ(4x) | ▲ ラカチャキ |
| ● トコチ(2x) | ⊗ アルカイ・ワルミ(4x) | ▲ アルカイミージャ |
| ● チマコ(2x) | ⊗ プルントーサ(4x) | ■ リヤマ・ニヤウイ |
| ● ヤナ・ウンチューナ(2x) | ⊗ ブカ・ボーレ(4x) | □ ブカ・マワイ |
| ⊕ マクタチャ(4x) | ⊗ ブカ・スーリ(4x) | ● ブカ・コーヤ |
| ⊕ コンビス(4x) | ⊗ アロス・コーヤ(4x) | ● スア・マンチャチ |
| ⊕ コーヤ(4x) | ⊗ ヤナ・マワイ(4x) | ● ヤナ・ソバ |
| ⊕ クシ(4x) | ⊗ ルキ(5x) | ★ イサーニョ |
| ⊕ ボーレ(4x) | ⊗ ユーラフ・ルキ(5x) | |

※ 呼称はすべてケチュア語による
 ※ ()内の数字は倍数性を示す。無記入は未判定のもの

図4 マルカパタのジャガイモ畑の畝で見られた品種 (山本 2000)

(Jackson *et al.* 1980; Brush *et al.* 1981)。

さて、それでは、このような栽培方法をどのように理解すれば良いのだろうか。マルカパタの村人なら、やはり品種によって栽培できる場所が違うからだと言うだろう。これには、ちょっと説明が必要である。マルカパタでは、耕地のほとんどは斜面に位置しており、その斜面のなかには急なところもあれば、平坦地にちかいところもある。また、岩がちのところもあれば、土だけのところもある。つまり、一枚の畑とはいえ、その環境は必ずしも一様ではないのである。

このような状況は、程度の差こそあれ、アンデス高地の畑では共通している。そして、一見したところ粗放に見える、このような畑にこそ多数の種類のジャガイモが栽培されていることから、人類学者たちは、多数の品種を栽培する理由として収穫の危険分散を指摘している。つまり、病害虫や気候、環境などに対する適応性の異なる品種を混ぜて栽培することで収穫の全滅を防いでいると考えているのである (Browman 1987; 木村 1988; 山本 2000)。

さて、以上までで述べた理由で、アンデス農民が多様な品種を栽培していることが説明できたであろうか。わたし自身は、これらの理由だけではまだ説明できないものが残る、と感じている。それというのも、アンデスの農民が様々な品種に対して示す態度のなかには、上述したような合目的な理由だけでは、説明のできないものがあると思われるからである。たとえば、図3中の *kefuiillo* と呼ばれる品種は、イモ(塊茎)が細長く、しかも曲がりくねっていて、収穫も調理もしにくいものである。また、この品種はとりたてて味がよいわけでも、栽培の上で優れた特性をもっているわけでもない。そして、農民はこの品種を栽培する理由を説明できない。それにもかかわらず、この奇妙なジャガイモを栽培しつづけているのである。

じつは、「なぜ、この品種を栽培するのか」と聞いて、その理由がちゃんと答えられる品種はさほど多くはない。たしかに、「この品種は、寒さに強い」、「こちらのジャガイモは、水分の多い畑でも栽培できる」と説明できる品種もあるが、それは全体のうちの一部でしかない。ほとんどの品種は、「習慣だから」とか、あるいは説明できないままに栽培しているのである。もちろん、説明できないからといって、理由がないわけではないだろう。言葉にはできないものの、栽培している以上、なんらかの理由があるにちがいない。

それでは、その理由とは何であろうか。わたしが考えているのは、アンデス農民の価値観または信仰にかかわるものである。それに気がついたのはジャガイモではなく、トウモロコシの収穫のときであった。収穫されたトウモロコシのなかに、ときに異常な形態をもつものが出ることがあり、それを農民はきわめて重要視しているからである。その理由について述べる前に、もうひとつ報告しておきたいことがある。

それは、異常な形態をした栽培植物、いわゆる「変わりもの」を生み出す仕掛けをア

ンデス農民が準備していると思われることである。これもアンデスで多様な品種が見られる背景のひとつになっていると思われるので、それをマルカパタでの観察例から少し報告しておきたい。なお、「変わりもの」とは、植物学的には突然変異や交雑による遺伝的な交流などによって生じた変異のことである。

4 「変わりもの」を生み出す仕掛け

先述したように、マルカパタ村ではトウモロコシ畑は標高3,000メートル以下にある。ほとんどの農民の家は標高4,000メートル前後の高地にあるので、トウモロコシ畑には家族ごとに出作り小屋をもっている。先述したように、この小屋は植え付けや収穫のときに、一時期、家を離れ、移り住んで作業をするためのものである。

トウモロコシの収穫は6月、雨期がおわり、本格的な乾期に入った時期である。4月まではときおり降っていた雨もすっかりあがり、晴天がつづく。こんな季節を待っていたかのように、農民たちは家族をあげて一斉に谷をくだり、トウモロコシ畑にやってくる。そして、すぐにトウモロコシの収穫にとりかかる。枯れて茶色になったトウモロコシの茎から穂をもいでまわる。大人だけでなく、子どもも手伝う。

収穫されたトウモロコシは、ある程度集まると、出作り小屋の近くに移される。みんな腰をおろし、ティピーナとよばれるペーパーナイフのようなものを手に持って、トウモロコシの皮をはがす。さらにティピーナで皮に切れ目を入れ、穀粒のついた穂を取り出す。この皮を取り去った穂は、数日から1週間ほど天日で乾燥する。

この乾燥から播種にかけての作業で興味深い行為が見られる。先述したように、ヤクタ・サラは約20種類、ワリ・サラも10数種類ほどの品種があるが、これを赤、白、黄、紫色などの果穂の色によって大別して乾燥し、貯蔵するときもこのグループ別におこなう。ところが、播種するときは、大別された品種を混ぜ合わせ、果穂からはがした穀粒も丹念に混ぜあわせる（カラー写真3）。さらに、播種のときも、50cm 間隔くらいで溝に穴を掘り、そこに混ぜ合わせた種子を3～5粒ずつ播くのである（カラー写真4）（山本 1980: 167）。

さて、1ヶ所に、このように多くの種子を播くのはなぜだろうか。マルカパタの農民によれば、それは播種後に甲虫の幼虫によって幼苗が食べられる恐れがあるためだとされる。

しかし、はたしてそれだけだろうか。播種前に様々な品種を混ぜ合わせていることも考慮に入れば、これは「変わりもの」の出現を期待してのことではないのか、と推察される。実際、トウモロコシは他家受粉をする代表的な作物であることから、1ヶ所に数株のトウモロコシを植えれば、他の株と他家受粉をする機会はきわめて大きくなる。そして、そのなかには、これまで知られていなかった「変わりもの」が出現する可能性も

大きくなる。残念ながら、この可能性を農民に聞いても確たる返事はないが、意識していないとしても上記の一連の行為は「変わりもの」を生み出す仕掛けになっていることを示唆するものと考えられる。

このような仕掛けは、ジャガイモ畑でも見られる。それは、先述した標高4,000m前後のプナヤルキの共同耕地である。この共同耕地の周辺にはしばしば雑草としてジャガイモの野生種が分布している（カラー写真5）。ときに、この野生種はジャガイモ畑の中にまで侵入していることさえあるが、これらの野生種をマルカパタの農民は雑草として抜き取ることはない。この行為も、新たな品種の出現に効果があると考えられる。一般に、ジャガイモは栄養体繁殖をする作物として知られているが、アンデス高地では大半のジャガイモが果実をつけ、種子繁殖も可能である。したがって、畑の中に侵入した雑草が栽培種と交雑し、新たな品種を創り出す可能性が大いにある⁷⁾。

実際に、ジャガイモの栽培種の中には野生種と栽培種が畑の中で交雑して生まれたものもあることが知られている。たとえば、アンデスで一般にルキの名前で知られているジャガイモ (*Solanum juzepczukii*) は、アンデスのジャガイモの中でもっともプリミティブな栽培種 (*S. stenotomum*) の畑の中に侵入した野生種 (*S. acaule*) とのあいだの雑種起源であることが知られている (Hawkes 1990: 60)。ちなみに、アンデスでルキとよばれるジャガイモにはもう一種 (*S. curtilobum*) あるが、前者は3倍体、後者は5倍体であるため、どちらも不稔で種子をつけず、栄養体繁殖しかできない。また、これらの二種は有毒成分を多量に含んでいるため煮ただけでは食べられず、そのためスペイン語では「苦いジャガイモ」を意味するパパ・アマルガとよばれている。

それでは、なぜアンデスではこのような特異なジャガイモまで栽培化されたのであろうか。もし、生じた変異、すなわち「変わりもの」が、そのまま見過ごされたり、除去される対象になれば、新しい栽培種や新しい品種の成立はなかったはずである。それはジャガイモに限らず、すべての栽培植物に言えることであろう。いや、栽培植物のみならず、これは家畜にも言えることであろう。

そこで、家畜についても少し言及しておこう。このジャガイモの例のように、アンデスでは野生動物と家畜のあいだでも雑種を生じることがあり、それを農民は忌避していないからだ。アンデス在来の家畜としては、主として毛が利用されるアルパカと輸送力として利用されるリヤマが知られているが、このアルパカがまれに近縁野生種のビクーニャと交雑し、雑種の生まれることがある。そして、この雑種を農民は忌避するどころか、むしろ歓迎しているふしさえある。なお、この雑種の呼称をマルカパタでは聞きもらしたが、他の地域ではパコ・ビクーニャとよばれている。

また、アルパカはリヤマとも時々交雑し、その雑種はワリまたはワリソの名前で知られる。また、ワリは毛の質ではアルパカに劣り、輸送力の点でもリヤマに劣ることも知られている。にもかかわらず、ワリは間引かれることなく、マルカパタではリヤマとと

もに輸送手段として使われている。これは、実用性の点だけに注目すれば奇妙なことである。また、リヤマとアルパカを完全に隔離して飼えばワリが出現するはずはないが、そうはしていない。だからこそ、時々、ワリが生じるのであろう。

その理由をマルカパタでは明らかにできなかったが、アンデスの牧畜文化に詳しい稲村哲也教授（愛知県立大学）から貴重な情報が得られた。同氏の調査地であるペルー南部アレキパ県のプイカ地方でもアルパカとリヤマの雑種はワリとよばれ、しかもワリは「豊穡の象徴」とされる。そのため、ワリは忌避されるどころか、むしろ数百頭ほどのリヤマの群れの中に一頭くらいワリの存在が望ましいとされるのである。

この例にも見られるように、アンデスでは「変わりもの」を決して実用性ではなく、他の価値観で判断しているのである。それでは、その価値観とは何か。それこそが、先に言及した信仰に起因するものである、とわたしは考えている。そこで、この点について以下で検討してみよう。

5 「トウモロコシの神」と品種の多様性

先述したように、マルカパタではトウモロコシを収穫したあと、しばらく野天に放置して天日で乾燥させるが、このとき奇妙なトウモロコシが見られることがある。それは、野天にひろげられたトウモロコシの上に置かれている。そのトウモロコシは、果穂の一部が割れていたり、途中から二重または三重になったりしている異常な穂である。これを村人はママサラという（写真3）。ママは、ケチュア語で大きなもの、あるいは神をさし、サラはトウモロコシのことなので、ママサラは「大きなトウモロコシ」あるいは「トウモロコシの神」といった意味である。



写真3 異常な形態をしたトウモロコシの果穂。マルカパタでは、ママサラ（トウモロコシの神）とよばれる。



写真4 天日乾燥中の果穂のお守りとして立てられた、3本の果穂をもつトウモロコシの株。

村人によれば、このママサラは大地の神のパチャママに収穫を感謝して捧げるものだという。パチャママは、このマルカパタ村だけでなく、アンデスの農民が広く信じている神であり、大地にいると考えられている。また、彼らは神秘的な繁殖力は地下世界に宿っていると考えていることから、パチャママは農耕の神とみなされているのである。また、ママサラは収穫されたトウモロコシのお守りだという人もいる。

この農耕の神であるパチャママには、ママサラとは異なる別のタイプのトウモロコシが捧げられることもある。マルカパタでは、通常トウモロコシは1本の茎に1、2本の果穂しかつけないが、ときに3、4本の果穂をつけることがあり、このような多くの果穂をつけた植物体（株）そのものが捧げられるのである。これも乾燥中のトウモロコシの上に置くこともあるが、ふつうは周辺に立てる（写真4）。これも、パチャママ神への捧げもの、あるいは乾燥中のトウモロコシのお守りだと言われる。

さて、それでは、なぜ、このようなトウモロコシがパチャママ神に捧げられるのであろうか。また、なぜ、このような異常な形態をしたトウモロコシが収穫したトウモロコシのお守りと考えられるのであろうか。この点については、村人は古くからの習慣だからとしか答えてくれない。しかし、この習慣はインカ時代からの伝統らしく、インカ帝国が征服されてからまもない時期の記録にも記されている。たとえばスペイン人神父の

アリアーガは16世紀末にカトリックの布教のためにアンデスに派遣された人物であるが、彼が書き記した記録のなかに以下のような記述が見られる。

「・・・土地が肥沃で大きな穂をたくさん結んだ、育ちのよいトウモロコシの太い茎や、ふたつの穂がくっついて生えてきたものをママサラと呼んで重要視し、トウモロコシの母として崇拝する」。(アリアーガ 1984 (1621): 409)

「同じような迷信から、ミクササラ、マタイサラまたはカウリヤサラと呼んで、鮮やかに色のついたトウモロコシの穂をとっておく。また、穂がまっすぐに伸びずに渦巻き状になっているものはピルアサラと呼ばれる。このミクササラとピルアサラは、迷信により、護衛の役を果たすというので、トウモロコシの山積みやピルアの上に置く」。(アリアーガ 前出: 410)

後者の文中でアリアーガが二度も迷信と述べているのは、彼がキリスト教徒であり、土着の信仰を異教としてみなしていたからにほかならない。また、後者の文中で述べられているピルアは貯蔵籠のようなもので、マルカパタではタッケとよんでおり、そのためピルアサラではなく、タッケサラとよんでいる。そして、このタッケサラは実際に貯蔵籠いっぱい詰められたトウモロコシの上に置かれ、トウモロコシのお守りだとされる(写真5)。

とにかく、これらの記述の内容は、先述したマルカパタでのわたしの観察とほぼ同じものと見てよいであろう。このことは、マルカパタでの習慣がインカ時代からの伝統を受け継いだものであることを物語る。

では、もう一つの主作物であるジャガイモについてはどうだろうか。残念ながらマルカパタではその種の情報は得ていないが、かつては存在した可能性がある。それというのも、コボが次のように述べているからである。



写真5 収穫籠に貯蔵されたトウモロコシ。白いトウモロコシの上に、黒っぽいママサラ(タッケサラ)が置かれている。

「収穫のとき、ふつうとは違った形の、リヤリヤワというジャガイモや、他とは変わったできのトウモロコシの果穂、その他の豆類などが見かけられると、それに口づけをして拌み、酒を飲んだり、踊ったり、その他特殊な礼拝式を行った」。(Cobo 1956 (1653): 166)

このリヤリヤワというジャガイモについては、16世紀に中南米を広く歩いたスペイン人のアコスタ神父も次のように言及している。

「どんな種類のものでも並はずれていれば、彼らの目には神々しく思われ、ほんの小石とか金属、いやそれのみか地から生える根菜や果実にいたるまでも、そのような扱いをするのである。リヤリヤワという名で呼ばれている、じゃがいもの珍しい形をしたものなどは、その一例で、それに接吻し、礼拝する」。(アコスタ 1966 (1590): 133)

さらにアリアーガは、先の文章につづけて次のような興味深い記録を残している。

「・・・彼らはアホママとよばれる、二つのイモがくっついたジャガイモについても同じような迷信をもっており、このジャガイモの豊作を願って取っておく」。(Arriaga 1968 (1621): 205)

マルカパタでは異常な形態をしたジャガイモをトウモロコシの場合のように神として扱うことはないが、みんなが大きな関心を持ち、それを手に入れたいと願っている。これも古くからの考え方、スペイン人から見れば「迷信」が影響しているのであろう。

じつは、このような考え方はトウモロコシやジャガイモだけでなく、人間に対してもあった。それについては、アリアーガが次のような記録を残している。

「チュチュ、またの名クリの遺体とは、ひとつの腹からふたりが生まれて早死にしたとき、かめに入れて家の中にしまっておくものをいうが、これは聖なるものと見なされ、稲妻の子と考えられている。(中略) 同じようにして、足から生まれた子が小さいうちに死ねば、チャクパとしてその遺体を保存する。これにも迷信がいくつもまつわりついている」。(アリアーガ 1984 (1621): 410)

つまり、双生児や逆子なども聖なるものと見なされていたと述べているのである。これをトウモロコシに関する記述とあわせてみると、インカ時代の人びとは生物界に生じた特異なものに特別な関心を持ち、聖なるものと見なして崇拜したり、重要視していたと考えられる。マルカパタにおけるママサラなどに対する農民の態度を見てみると、このような考え方または信仰が少なくとも作物に対しては今もなお生きつづけているようである。

おそらく、このような考え方が生きつづけているところでは、作物における変異を重要視し、栽培上の特性などが知られていなくても、それを維持していこうとするのではないか。冒頭で述べたように、アンデスでは在来品種にこだわり、多数の品種を栽培し

ているところが少なくない。そして、それは大体において伝統的な色彩の濃いところであり、そのような地域こそは上述したような信仰が生きつづけているところでもある。このこともまた、品種における多様性の維持とアンデス独特の考え方のあいだの密接な関係を物語っているようである。

このように見てくると、上述したアンデスの人びとの考え方は、品種における多様性の維持だけではなく、新しい品種の創出とも関係するのではないかと思われる。それというのも、これまで述べてきた多様な在来品種はいずれもアンデスの人びとが長い時間をかけて創り出してきたものにほかならないからである。また、新しい品種を創り出すにあたっては、畑のなかで見いだされた変異に関心を持ち、それを積極的に残してゆこうとする考え方や態度も欠かせないからである。

じつは、このような変異に関心を持ち、それを崇拝する考え方はアンデスでは広く信じられているワカ信仰と密接な関係がある。また、このワカ信仰はかなり古い時代にまでさかのぼることができそうである。そこで、以下では、このワカ信仰と作物の多様性の関係について検討していこう。

6 多様性を生むワカ信仰

インカ帝国が征服されてから間もない16世紀から17世紀にかけてのスペイン人の記録(クロニカの名前で知られる)には、ワカ信仰に関する記述が少なくない。カトリックの布教をアンデス侵略の大きな目的のひとつとしていたスペイン人たちにとって、土着のワカ信仰が大きな障害となったからである。さきのアリアーガもその一人で、彼はキリストを唯一絶対の神とする立場からワカ信仰を偶像崇拝として糾弾し、根絶するための方策を提言している。

そのアリアーガによれば、インカ時代のアンデス住民が信仰の対象としていた偶像は、「山、丘、川や、彼らの生みの親、祖先をあらわす像」などあり、これらはまたワカともよばれたという(図5)。

インカの血をひくスペイン人との混血のインカ・ガルシラーソは、ワカの内容について以下のように詳しく述べている。

「[ワカは] そこに悪魔が身を潜めて声をかけてきた「聖なるもの」、すなわちこの敵がインディオたちをたぶらかし、自分が神であると思ひこませようとしてその中に入りこんでいた、偶像や岩や大きな石や樹木などを意味する」。(インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 112-113)

「一方で、人に恐怖と驚きをかきたてるような醜怪なものもワカと呼ばれ、長さが二五フィートから三〇フィートもあるアンティス(アマゾン)地方の大蛇にこの名がつけられた。また、例えば、一度に二人の子を生む女のように、通常の成りゆきから逸脱した者もすべてワカと呼



図5 インカ時代のワカ信仰。右手の人物はインカ王，その前に置かれているのが各種のワカ（Guamán Poma 1980（1613））

ばれ、その出産と誕生の異常さ故に母親と双生児にこの名称が与えられた。この場合、人びとは嬉々として母親を通りに連れ出し、歌と踊りのお祭り騒ぎの中、多産を祝って彼女の頭に花冠を飾る」(インカ・ガルシラーソ 前出：113)。

このような記述を見ていると、アンデス住民は自然界で見られる特別に大きなものや異常な形態をしたものなども崇拝し、それに特別な力も認めているようである。双生児の母親をもワカとよび、多産を祝ってお祭り騒ぎをするというのも、これを物語るものである。この双生児が聖なるものとみなされることはアリアーガも言及していたが、インカ・ガルシラーソは次のようにもっと多くの例をあげている。

「・・・逆子や体を曲げたまま生まれてくる赤子、手や足に指が六本ある者、せむし、あるいは頻繁に見られる兎口や、自然にねらいをつけられた者と呼ばれていた斜視のような、顔や身体に程度の差こそあれ何らかの欠陥のある者もワカである。」(インカ・ガルシラーソ 前出：113-114)

ここでインカ・ガルシラーソは「何らかの欠陥のある者」という表現をしているが、これはヨーロッパ的な見方であろう。彼は20歳頃までクスコにいたが、それ以後はスベ

インでずっと過ごしたからである。とにかくワカとよばれている人たちは、アンデスのな見方からすれば「通常の成りゆきから逸脱」し、特別な力あるいは神秘的な力をもった者と考えられるのである。

1530年代か40年代半ば頃にペルー南部高地で生まれ、数多くの挿絵のついた大部な本の『新しい記録と良い政治』を書いたグアマン・ポマもその著書の中で片足の人間や「せむし」（背柱後湾）を描いている。インカ・ガルシラーソの記述にもとづけば、グアマン・ポマも彼らを聖なるもの、あるいは特別な力をもっていると考えていた可能性がある。

さて、このような見方は家畜や作物に対してもあった。たとえば、アンデス産のラクダ科家畜のリヤマに対しては次のように述べている。

「・・・この名（ワカ）は、一度に二匹の子を産んだヒツジにもつけられた。私がここでヒツジと言うのはかの地の家畜（リヤマ）のことであるが、これは大きな動物の例にもれず、牛や馬のように通常は一匹しか産まないからである。そして双子の子ヒツジはきわめて神聖なもののみなされていたのである」。 (インカ・ガルシラーソ 前出：113)

ここでは先述したアルパカとリヤマの雑種のワリについては何も述べられていないが、おそらく現在もワリが「豊穡の象徴」とみなされるのも、さかのほればワカ信仰にもとづく可能性がある。一方、作物に対しては次のような興味深い記述がある。

「・・・美しさや特質において同種の他のものより際だっているもの、例えば、同じ株の中で最も大きく最も美しいバラの花とか、同じ樹の中で最も大きなリンゴ、ナシ、そしてその他任意の果実に、この同じ名称が与えられた。そして、樹木そのものも、その種の中で卓越しているものにこの名（ワカ）がつけられたのである」。 (インカ・ガルシラーソ 前出：113)

興味深いことに、ここで述べられているバラやリンゴ、そしてナシも、いずれもアンデス在来のものではなく、ヨーロッパから導入されたものである。つまり、大きさや形態などの点で通常のものとは異なり、特異なものに対しては、アンデス原産のものだけではなく、すべてのものをワカとよんで、神聖なもののみなしていたのである。このような見方や考え方は、作物や家畜のなかに突然変異などで生じた「変わりもの」に対しても働くであろう。そして、それらに強い関心をもつだけでなく、神聖なもののみなして、維持、保存することにもなるだろう。

ただし、このようなことが可能となるのは、ワカ信仰のような考え方が古い時代から連綿として長くつづいてきたことが前提となる。新しい変異が認められ、それが新しい品種となるまでには、きわめて長い時間が必要となると考えられるからである。これまで見てきたように、少なくともインカ時代から現在にいたるまで、ワカ信仰もしくはそれに類似した信仰はつづいてきたと見てよさそうである。しかし、インカ時代以前はど

うであったのか。それを以下でみてみよう。

7 プレインカ時代の土器と織物にみられる生物の多様性

周知のように、アンデスでは本来文字が使われていなかったのに、インカ以前の時代、すなわちプレインカ時代のことを文字で知ることはできないが、文字にかわる興味深い資料がある。それは、プレインカ時代につくられた数多くの土器や織物類である。そのなかには、人物や作物、家畜などをモチーフにしたものが数多くあり（山本 1992b）、しかも奇妙な形、異常な形をしたものが少なくないのである。

たとえば、写真6は、10世紀頃からインカ帝国が成立する15世紀頃までペルー北部海岸を中心とする地域で栄えたチム文化のジャガイモを象った土器であるが、これだけを見てもジャガイモには多様な品種のあったことがわかる。ジャガイモは、イモ（塊茎）そのものの形態のほかに、目（芽）の部分に特徴があるため、その目の多少や大きさ、窪みの深浅などによって品種分類されるが、これらの土器に象られたジャガイモもその目の部分に多様な特徴が認められるからである。さらに、塊茎の全面が「目」でおおわれているものや、親イモにたくさんの子イモが付随しているものなど、異常な形態をしたジャガイモもある。

また、カラー写真6に示したのはペルー中央部の海岸地帯で10世紀頃に栄えたチャンカイ文化の織物であるが、この織物には人間の手と思われるものが数多く見られる。ほとんどの手は5本指であるが、中央部には6本の指をもつ手が見られる。さて、これは何を意味するのであろうか。ほとんど5本指の手ばかりの中で、1本だけ6本指の手があるのは、後者のような手がふつうは見られず、それゆえにインカ・ガルシラーソが述べているような「通常の成りゆきから逸脱した」ものであり、「聖なるもの」とみなされたのではないかと考えられる。

このような「通常のものから逸脱」したものは土器でも数多く見られる。インカ・ガルシラーソが述べている兎口（^{としん}兎唇）の人物や盲人は、インカ時代をさかのぼること約1000年前のモチエ文化の土器でも見られる。また、土器には逆子こそ見られないものの、分娩に関して興味深いものが見られる。それは、医学的に「^{がんい}顔位」で知られる異常分娩である。正常分娩では新生児の顔は見えないが、カラー写真7に示したように回旋異常の顔位では顔が見える。これは、全分娩の0.2%、500人に一人くらいの頻度でしかあらわれないとされる⁸⁾。つまり、これも「通常の成りゆきから逸脱した」ものなのである。

さらに、土器の表象には片手しかない人物、片目の人物、さらに医学的には「^{そうせい}叢生」として知られる歯がねじれたように生えたり、重なりあった状態の人物などのほか、いくつかの奇形が合併する人物も見られる（カラー写真8）。このような四肢の欠損や眼球欠損、さらに先天性眼瞼下垂などの奇形が合併するものは医学的にも奇形症候群とよ



写真6 様々なジャガイモの品種を象ったチムーからインカにかけての時代（10～15世紀頃）の土器。イモの形態，特に目の数や形が様々に異なっている。土器は，ペルー国立人類学考古学博物館および天野博物館所蔵

ばれて知られていることから、これらの土器の表象は空想上のものではなく、実在した人間を表象したものであると考えて間違いはないであろう。このことは、アンデスでは人間も含めて生物の世界で見られる特異なものに大きな関心をもっていたことを雄弁に物語るであろう。

このような土器の表象には人物だけでなく、作物も多くみられるが、その土器に表象された作物にも異常な形をもつものがモチーフとして取り上げられている。たとえば、トウモロコシでは先述したママサラと同じように、雌穂が渦巻き状になっているものや条列がひどく乱れているもの、さらに多数の雌穂が一本になっているものなどもある。

さて、これらの表象をどのように判断すべきであろうか。インカ時代と同じように「通常の成りゆきから逸脱したもの」として崇拝されていたのであろうか。先述したように、インカ以前には文字資料がないので、これについて述べたものはない。しかし、ヒントになるものはある。それは、このように特異な形態をした作物がしばしば神像と思われるものとともにモチーフになっていることだ。

たとえば、写真7はモチエ文化の土器で、数多くのトウモロコシの雌穂がくっついたものであるが、その上部に人間のような顔がみえる。しかし、その口には牙があることから、これは人間ではなく、神性をもった農耕神のようなものであったと判断されている。また、モチエ文化の土器にはトウモロコシを表象したものが多く、土器に表象された作物の図像を分析したEubanksによれば、彼女が扱った75点の図像のなかでトウモロコシが33点、全体の42%を占めていた（Eubanks 1999: 27）。そして、そのうちの21



写真7 ベルー北部海岸地帯で数世紀ごろから栄えたモチエ文化の土器。異常なトウモロコシの果穂と神像を表象している。ペルー国立人類学考古学博物館所蔵

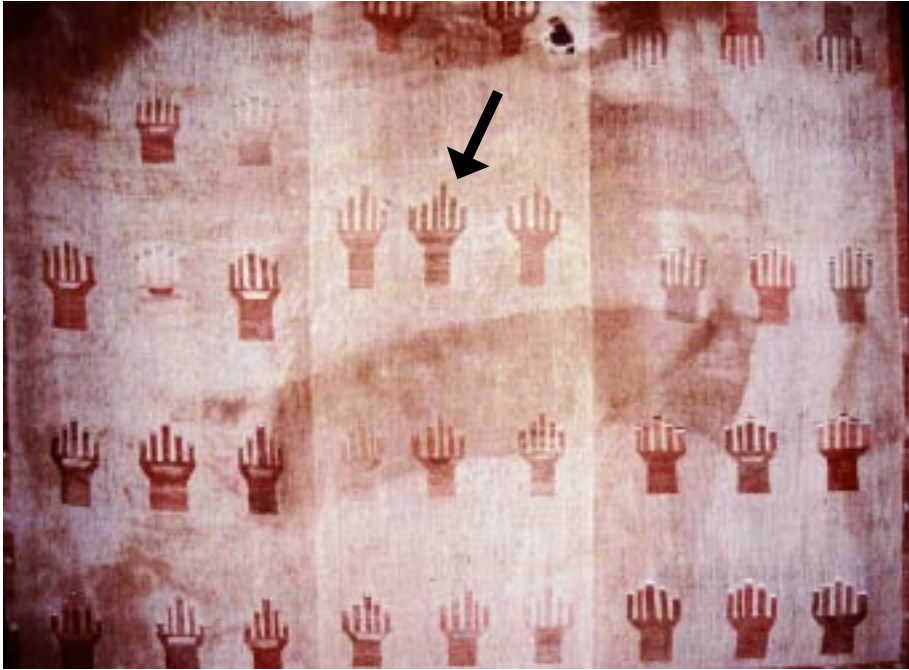
点、すなわち60%以上でトウモロコシはモチエの神とともに表象されており、そのトウモロコシが前掲の写真のようにしばしば異常な形態をしているのである。これは、異常な形態をもったものが特別な力、あるいは神秘的な力をもったものであることを物語るものではないか、と考えられる。

この点で、モチエ文化の土器にはジャガイモを象ったものにも興味深いものがおおい。ジャガイモではトウモロコシのように神とともに表象されることはないが、先述したようなクロニカで述べられていた「珍しい形をしたもの」や「二つのイモがくっついたジャガイモ」などが少なくない。たとえば親イモにいくつもの子イモがつくことは作物としてのジャガイモではあまりないが、Salaman (1985) も指摘しているようにモチエ文化の土器ではしばしばあらわれる。そして、これらの親イモや子イモが人間の顔を象り、しかもその人間がしばしば写真8のように兎口をもった人物として表現されている。また、カラー写真9のように、多くの子イモをつけ、その子イモには子どもの顔が描かれ、その土器の表面には父親と考えられる男性とともに男性性器も描かれているものがある。これらも、異常な形態をしたジャガイモが神性をもつもの、あるいは豊穡の象徴として扱われていたことを物語るものであろう。

ここまで、わたしは栽培植物と人間とを分けて書いてきたが、アンデスの精神世界では作物も人間も同じように扱われてきた可能性がある。「通常の成り行きから逸脱した」人間をわたしは奇形と表現したが、栽培植物は自然界における奇形にほかならないからである。つまり、冒頭で植物のドメスティケーションを「栽培化」として紹介したが、より実態にそった言い方をすれば、栽培植物は形態の上でも、生理生態の上でも自然界には存在しないなどの点から、「奇形化」とも言えるのである。ただし、奇形といえば、



写真8 ジャガイモと人間の顔を表象した土器（モチエ文化）。人物が兎口であることに注意。ペルー国立人類学考古学博物館所蔵



カラー写真6 10世紀頃にペルー中部海岸地帯に栄えたチャンカイ時代の織物（約1m×1.8m）。5本指の手の中に、ひとつだけ6本指の手がみられる（矢印）。ペルー・天野博物館所蔵



カラー写真7
ナスカ文化（紀元数世紀頃）の土器に象られた異常分娩。医学的には「^{がんい}顔位」分娩として知られる。写真は天野博物館提供（白根全氏撮影）



カラー写真8 ペルー北部海岸で14世紀ごろに栄えたチムー・ランバイエケ文化の土器。奇形症候群と見られる人物の顔が表象されている。片目で、歯は医学的に「叢生」として知られるもの。ペルー・天野博物館所蔵



カラー写真9 モチェ文化の土器に象られた異常な形態をもつジャガイモ。土器の表面には、大人や子どもたちの顔とともに、男性性器も描かれている。ペルー国立人類学考古学博物館所蔵

「弱者」と考えられそうであるが、これは日本的あるいは欧米的な見方であろう。アンデスでは奇形は「弱者」どころか、逆に特別な力をもつ者あるいは神秘的な力をもった者と考えられていたからである。

いずれにせよ、プレインカ時代においてもナスカ文化やモチェ文化では、人間も含めて生物の多様性に大きな関心を持ち、それらに特別な力、あるいは神秘的な力を認めていたと考えられる。なお、ここで扱っているナスカ文化とモチェ文化がおこった地域は、どちらもペルーの海岸地帯に位置しており、そこは大部分が砂漠となっているところである。また、これら二つの文化領域は広大な海岸砂漠を1,000キロメートル以上も隔てて位置していることなどから、このような価値観や宗教観は海岸地帯のみならず、アンデス全域で広く生きていたと考えられる。

いいかえれば、現在までつづくワカ信仰は⁹⁾、1500年もの年月を超えてアンデスで広く、そして連綿として長くつづいてきたと判断できる。その起源については明らかでないものの、さらに古い時代にまでさかのぼる可能性もある。それでは、これは本稿が目的とするドメスティケーションに関して何を物語るのであろうか。それを今後の見通しとともに、以下で少し論じて本稿を閉じることにしたい。

8 歴史に埋もれた栽培植物と人間の関係—むすびにかえて

アンデスにおける多様な在来品種の利用は、これまで見てきたようにアンデスの土着信仰であるワカ信仰と密接な関係をもっていると考えてよいであろう。そして、そのワカ信仰は明らかにインカ時代にまでさかのぼることから、この信仰が多様な品種の維持にも有効に働いていることが考えられる。さらに、このワカ信仰は、インカ時代よりも1000年も前のモチェやナスカにも生きていた可能性があることから、品種の多様性の創出にも関係していると考えられる。もしそうであれば、ワカ信仰に象徴されるアンデス独特の価値観や考え方こそが、多様な品種のみならず、多様な栽培植物や家畜を生み出した要因のひとつとみなすことさえできるかもしれない。

これまで先住民社会における品種の多様性については様々な視点から論じられてきたが、特定の文化は多様性を維持する文化を内在させていると人類学者は指摘してきた。その代表例がレヴィ＝ストロースであろう。彼は、グアテマラやアッサムでのトウモロコシ栽培の例をひき、そこで多様な品種が維持されているのは、「未開」とみえる人びとの経済的活動や思弁的活動に浸透している弁別的差異に対する関心の証拠であると述べている（レヴィ＝ストロース 1976: 86-88）。

このような考え方に対して、品種の実用的な価値を重視する見方もある。たとえば、宮脇（1998）は、アフリカにおけるモロコシ栽培を例にあげ、生存の基盤である栽培植物や家畜の品種は日々の必要性にもとづいた個人的な実践によって維持されていると

主張している。じつは、わたし自身も、アンデス高地の農耕をあまりにも文化的なものとして捉える人類学者たちの考え方に疑問をもち、品種の多様性は生存戦略、とくに危険分散と大きな関係があると述べたことがある（山本 2000）。

それでは、以上に述べたような文化的、実用的、さらに生存戦略的な見方で品種の多様性の特徴は説明できるのであろうか。たしかに、品種の多様性の維持やその利用については、ある程度の説明ができるのかもしれないが、そのような多様性を何が生み出したのかという点についてはまったく説明できないであろう¹⁰⁾。ましてや、何がアンデスで多様な栽培植物を生み出したのか、という点について上記の理由はまったく説得力をもたない。松井（1989: 28）も指摘しているように、「ドメスティケーションを始めた人々は、自分たちがおこなっている作業が、長期的に何らかの遺伝的形質の変化を伴うドメスティケーションという結果をもたらすということを知らなかった」と考えられるからである。

それでは、はたして何が多様な栽培植物のドメスティケーションを生んだのであろうか。また、何が品種の多様性を生んだのであろうか。この疑問は、「研究される事柄が先史時代の霧の中にある」ため、「決定的な回答はありえないのかもしれない」（アイザック 1985: 1）が、その解明に向けての努力を放棄するわけにはゆかないであろう。ドメスティケーションは人類史上において画期的な変化をもたらし、民族学・文化人類学の分野では無視できない問題だからである。そして、本稿では仮説としてアンデスの人々の価値感あるいは宗教観がドメスティケーションや多様な品種の創出に大きな役割を果たした可能性を提示したのであった¹¹⁾。

もちろん、このような仮説を検証し、結論づけるためには、まだ決定的な証拠を欠いていることを認めざるを得ない。ドメスティケーションにかかわる人間の側からの証拠の多くは長い歴史のなかに埋もれてしまっているからだ。しかし、それを掘りおこす努力はつづけなければならないだろう。栽培植物もその多様な品種も、自然界には存在しないものであり、人間によって創り出されたものであることから、その創出には人間の植物に対する行為や考え方が大きく貢献していると考えられるからである。

残念ながら、伝統的な色彩を濃く残したアンデス高地でも、近年道路網が整備され、現金経済が深く浸透したせいで、急速に在来作物や在来品種が失われているところが少なくない。とくに都市部に近い農村では、その傾向が強い。先述したように在来品種は一般に収量が低いため、生産性の高い商業品種にとってかわられているからである。

その結果、伝統的な価値観や土着宗教が今なお生きつづけているところは、地理的にきわめて限られた地域のみになっている。それは、ほとんどの場合、都市部から遠く離れた交通の不便な辺境地であり、アプローチが困難なところである。実際、本稿で紹介したマルカパタもかつてはそのようなところであった¹²⁾。おそらく、それゆえにマルカパタでは多様な品種とともに、インカ時代あるいはそれ以前からの価値観や宗教も生き

つづけていたのであろう。

しかし、調査地へのアプローチが困難であっても、ここで示したような研究を深化させるためには比較研究が欠かせない。そして、そのためには今後もマルカパタのようなところを求めて、人間と栽培植物との関係を明らかにする努力をつづけなければならないであろう。本稿も、そのような挑戦的な試みのひとつとして了解していただければ幸いである。

付 記

本稿は、下記の文献中の山本（1998）に新たに得られた資料を加え、大幅に加筆、改稿したものである。改稿にあたっては、共同研究会において「何が品種の多様性を生むのか—民族学・考古学・歴史学の視点から」の題名で発表したおりに、共同研究員の皆様からいただいたコメントやご助言を参考にさせていただいた。アンデス研究者の稲村哲也氏（愛知県立大学）は本稿を精読し、貴重なご意見をくださった。また、奇形に関する医学的な情報は奥宮清人医師（総合地球環境学研究所准教授）および坂本龍太医師（同研究所プロジェクト研究員）からいただいた。このような医学的知見を加えることにより、本稿が少しでも文理融合型研究の有効性を示すことができれば幸いである。本稿を準備するにあたっては、ペルーのリマ市にあるムセオ・アマノ（天野博物館）はあらためて土器の写真撮影を許可していただいた上、館長の天野美代子氏や理事の阪根博氏をはじめとする館員の皆様のご協力があった。また、歴史学や考古学で正式な教育を受けたことがないにもかかわらず、このようなテーマでわたしが報告できたのは二人の先達のおかげである。すなわち、考古学に関しては天野博物館の初代館長である故天野芳太郎氏、そして民族歴史学（エスノヒストリー）に関してはアンデスにおけるエスノヒストリー研究の第一人者である増田義郎先生（東京大学名誉教授）のご指導があった。以上、ご協力ご指導いただいた皆様方に厚く謝意を表しておきたい。

なお、本稿には差別的ととられる用語があるが、これは決して差別を容認し、助長することを意図したものではなく、クロニカ史料の表現を忠実に再現するためであったことをお断りしておきたい。

注

- 1) 日本を含め世界中で広く栽培されているジャガイモは4倍種の *Solanum tuberosum* だけである。
- 2) その代表的なものが、ペルーのクスコ地方で栽培され、現地で「パラカイ」とよばれる品種であるとされる（Gade 1999: 198）。
- 3) このマルカパタ村およびその村人の暮らしの詳細については山本（1992a）を参照されたい。ただし、この報告はあくまで1978年から1987年までの調査にもとづいて書かれたものであり、その後のマルカパタ村は大きく変貌している可能性がある。この点については山本（2006）を参照されたい。
- 4) このような行為は、以下のように17世紀にスペイン人たちによって書き残された記録の中にもみられる。
「高い山やひじょうに大きい石なども崇拜してモチャ（礼拝）を行い、ひとつひとつに名をつけて呼ぶ」[アリアーガ 1984（1621）: 400]。
- 5) プナは、アンデスで広く使われている環境区分の名称である。詳しくは山本（2007a）を参照さ

りたい。

- 6) とくに、男性は品種名を知らないことが多い。女性は、栽培に加えて料理などのためにも品種の違いを知る必要があり、そのせいで品種の違いを知悉しているのではないかと考えられる。
- 7) ポリビアの高原地帯における伝統的な栽培方法が、ジャガイモの野生種と栽培種との交雑を生むことが報告されている (Johans and Keen 1986)。
- 8) 医師の奥宮清人氏 (総合地球環境学研究所准教授) および坂本龍太医師 (同プロジェクト研究員) のご教示による。両氏の情報によれば、顔位はしばしば頭と脳の形成異常をとめない、それらを含めた胎児の奇形の合併率は60%に達するとされる。なお胎児は、分娩の経過とともに産道を通りやすいように、少しずつ体の向きを変えながら、骨盤内に進入していく。これが「回旋」とよばれるものであり、回旋の異常のために分娩の順調な進行が妨げられることは「回旋異常」とよばれる。
- 9) ベルー・アンデス高地の土着宗教を研究した細谷は、アンデス高地の土着宗教を「山の神信仰」ととらえ、その「宗教的職能者は、(中略) 通常耳や鼻等が特に大きい、体のどこかにあざや傷がある、雷にうたれたあとがあるなど、何らかの身体的特徴、すなわち「印」を有している」と報告している (細谷 1997: 40-41)。このことは、「通常の成りゆきから逸脱」した身体的特徴をもつ人が特別な力を持ち、さらに神性をもっているという考え方が、少し形を変えてはいるものの、今もなお生きつづけていることを雄弁に物語るであろう。
- 10) レヴィ=ストロースも前掲の論考の中で多様性の創出の要因については何も述べていない。むしろ、植物学者の E. Anderson (1952) の報告を例にひき、「種穂を慎重に選び、変わった苗は抜きさる操作によってのみ、純粋種をこのような条件に保つことができる」として、品種の多様性ではなく、均一性の説明をしている。
- 11) 宗教観がドメスティケーションに果たしたと考えられる大きな役割については、Isac (1959) や Sopher (1964) なども指摘している。とくに、アイザックは「初期の人々の宗教観は、植物の栽培化や動物の家畜化に重要な役割を果たしたように思われる」と述べている (アイザック 1985: vi)。
- 12) 私が調査をしていた1980年代当時、マルカパタへの定期的な交通の便はなく、唯一の方法がトラックの荷台に便乗させてもらってのものであった。しかも、ふつうでもクスコの町からマルカパタまで丸一日を要し、雨季などは土砂崩れなどのために3日くらい、ときには1週間もかかった。そして、マルカパタの中心地のプエプロ (ヤクタ) から先住民の人たちが暮らすプナの高原へは徒歩が唯一の交通手段であり、標高3,000メートルあまりの高地からさらに1,000メートルもの高度差を登る必要があるため、高度順応してからでも約10時間もかかった。

文 献

アコスタ, ホセ・デ

1966 (1590) 『新大陸自然文化史』(大航海時代叢書) 増田義郎訳, 東京: 岩波書店。

Anderson, E.

1952 *Plants, Man and Life*. Boston: Little Brown.

アリアーガ

1984 「ペルーにおける偶像崇拜の根絶」『ペルー王国記』(大航海時代叢書) 増田義郎訳, 東京: 岩波書店。

- Arriaga, Pablo José de
1968 (1621) *Crónicas Peruanas de Interés Indígena. Biblioteca de Autores Españoles.* Tomo CCIX. Madrid.
- Browman, D. L. (ed.)
1987 *Arid Land Use Strategies and Risk Management in the Andes: A Regional Anthropological Perspective.* Boulder: Westview Press.
- Brush, S., H. Carnery, and Z. Human
1981 Dynamics of Andean Potato Agriculture. *Economic Botany* 35(1): 70-88.
- Cabiesses Molina, F.
2007 *La Salud y los Dioses: La Medicina en el Antiguo Perú.* Lima: Científica del Sur.
- Carrión Cachot de Girardo, R.
1959 *La Religión en el Antiguo Perú.* Lima.
- Cobo, Bernabe
1956 Historia del Nuevo Mundo. *Obras del P. Bernabe Cobo*, Tomo 92, Madrid: Biblioteca de Autores Españoles.
- Eubanks, Marry W.
1999 *Corn in Clay. Maize Paleoethnobotany in Pre-Columbian Art.* Gainesville: University Press of Florida.
- Gade, Daniel W.
1999 *Nature and Culture in the Andes.* Wisconsin: University of Wisconsin Press.
- Guamán, Poma de Ayala, F.
1980 (1613) *El Primer Nueva Corónica y Buen Gobierno.* Siglo XXI, Mexico.
- Hawkes, J. G.
1990 *The Potato, Evolution, Biodiversity and Genetic Resources.* London: Belheaven Press.
- 細谷広美
1997 『アンデスの宗教的世界—ペルーにおける山の神信仰の現在性』 東京：明石書店。
- インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベガ
1985 『インカ皇統記—』(大航海時代叢書) 牛島信明訳, 東京：岩波書店。
- アイザック, E.
1985 『栽培植物と家畜の起源』 山本正三・田林明・桜井明久訳, 東京：大明堂。
- Isaac, Erich
1959 Influence of Religion on the Spread of Citrus. *Science* 129 (No.3343): 179-186.
- Jackson, M. T., J. G. Hawkes and P. R. Rowe
1980 An Ethnobotanical Field Study of Primitive Potato Varieties in Peru. *Euphitica* 29: 107-113.
- Johns, Timothy and Susan L. Keen
1986 On-going Evolution of the Potato on the Altiplano of Western Bolivia. *Economic Botany* 40(4): 409-424.
- 木村秀雄
1988 『リスク処理・相互扶助・歴史変化—アマレテ生産システム』 亜細亜大学経済研究所。

レヴィ=ストロース, クロード

1976 『野生の思考』大橋保夫訳, 東京:みすず書房。

松井 健

1989 『セミ・ドメスティケーション—農耕と遊牧の起源再考』東京:海鳴社。

宮脇幸生

1998 「生物多様性は文化によって維持されるのか?」『エコソフィア』2号:50-57。

Salamam R.

1985 *The History and Social Influence of the Potato*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Sopher, David E.

1964 Indigenous Uses of Turmeric (*Curcuma domestica*) in Asia and Oceania. *Anthropos* 49: 93-127.

Vavilov, N. I.

1926 Studies on the Origin of Cultivated Plants. Leningrad, *Bulletin of Applied Botany and Plant-Breedig*, XVI: 139-215.

山本紀夫

1980 「中央アンデス南部高地の環境利用—ペルー, クスコ県マルカバタの事例より」『国立民族学博物館研究報告』5(1):121-189。

1992a 『インカの末裔たち』東京:日本放送出版協会。

1992b 「プレインカの土器モチーフにみられるアンデスの食糧源」『モンゴロイド』15:10-18。

1996 「熱帯アンデスの環境利用—ペルー・アンデスを中心に」『熱帯研究』5(3/4):161-184。

1998 「何が品種の多様性を生むのか—アンデスの場合」高畑尚之編『生命体システムの由来と未来』pp.122-135, 総合研究大学院大学。

2000 「伝統農業の背後にあるもの—中央アンデス高地の例から」田中耕司編『自然と結ぶ—「農」にみる多様性』pp.24-51, 京都:昭和堂。

2004 『ジャガイモとインカ帝国—文明を生んだ植物』東京:東京大学出版会。

2006 『雲の上で暮らす—アンデス・ヒマラヤ高地民族の世界』京都:ナカニシヤ出版。

2007a 「八〇〇〇キロメートルの大山脈—その多様な環境」山本紀夫編『アンデス高地』pp.3-28, 京都:京都大学学術出版会。

2007b 「栽培植物の故郷」山本紀夫編『アンデス高地』pp.97-116, 京都:京都大学学術出版会。